

慶北方言の知覚方言学に関する研究

金徳鎬 · 岸江信介 · 瀧口恵子

The Study of Perceptual dialectology in Kyungpook dialects

Kim Deokhoⁱ Kishie Shinsukeⁱⁱ Takiguchi Keikoⁱⁱⁱ

Abstract

One of the principal concerns of traditional dialectology or dialect geography has been the discovery of isoglosses, the boundaries between two regions which differ with respect to some linguistic feature. J. K. Chambers & P. Trudgill had classified 7 items, that is lexical isogloss, pronunciation isogloss, phonetic isogloss, phonemic isogloss, morphological isogloss, syntactic isogloss and semantic isogloss(?)(1980:112-115), and had determined their function and their usefulness in dialectology. The categories described here are given in order of increasingly more abstract levels of linguistic structure, following current linguistic models.

But I make new notion of 'Impressive isogloss'. It means that native speaker has the thought of his own dialect category. I integrated the native speakers' cognitions and made the dialect map of nonlinguistic feature. After analyzing the nonlinguistic map, I have confirmed that the 'Impressive isogloss' had

ⁱ 慶北大学国語国文学科教授

Professor, Korean Language and Literature, Kyungpook National University

ⁱⁱ 徳島大学総合科学部教授

Professor, Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

ⁱⁱⁱ 啓明短期大学社会福祉相談科助教授

Assistant Professor, Social Welfare and Counseling, Keimyung College

relation to the grammatical difference (the ending of words) and the lexical divergence which differs in etymology by means of linguistic feature. Ultimately, this research will try to explain the Perceptual dialectology. The possibility of perceptual dialectology was confirmed in the present study.

Keywords: dialectology, Perceptual dialectology, geographical linguistics, dialect geography, image isogloss

1. はじめに

方言学者の主たる関心事は、地理的空間で言語的分布を確認することである。これを満足させるため、方言学者らが何よりも初めにせねばならないことは、研究対象地域で実際に使われていることばを精密に調査し、データを収集することである。その次の段階で、収集されたデータを一定の基準で分析し、地域的なバリエーションによって生ずる独特の体系や特徴的な方言現象を明らかにする。更に、地域的な分布が一目で分かる方言地図を作成して空間的方言の分布を確認し、過去にことばが移り変わってきた姿と、未来に起こり得ることばの変化を予測したりする。特に後者の場合、言語地図を作成して地理的分析も必要なため、地理学の力も借りねばならない。このような特性から、言語地理学(言語学+地理学)或いは方言地理学(方言学+地理学)と呼ばれる。この分野でまず行わねばならないことは、それぞれ異なることばの分布を確認する作業であり、このために「境界(boundary)」という概念を十分に理解していなければならない。この境界を方言学では等語線(isogloss)^{iv}と呼んでいる。

地理言語学(geographical linguistics)^vの研究で、等語線とは非常に重要な概念である。これはある言語的な特徴に注目し、その特徴を有する地域とそうでない地域を分ける境界を示す、言語地図(linguistic atlas)上の線のことである。(改訂増補版言語学辞典 1987: 478) 基本的に等語線という用語は、同じことばを使用する習慣や特徴を共有している線という考え方だが、一方では言語的排他性も前提にする用語である。方言区画を目的に論議を展開する場合、こういったことを必然的に

^{iv} 言語的には「iso(同一)」+「gloss(ことば)」となる。

^v 「地理言語学(Geographical Linguistics)」という用語は、W. G. Moulton(1972)、韓栄均(1985, 1986)、金徳鎬(1993, 1997)、申承遠(1996)で用いられた。これまでは一般的に、言語地理学(Linguistic Geography)という用語を最も多く用いてきた。だがこの用語は、基礎学問である地理学がメインとなる人文地理学の下位分野と見られており、既に地理学では普遍的に用いられている用語である。また、その目的も言語分布を地理的に表す言語的景観(Linguistic Landscape)に置いている。しかしながら、言語学では平面的に言語分布を明らかにする地理学的立場を超え、言語学的な解釈と言語の歴史を究明する研究として広めようという趣旨から、「地理言語学(Geographical Linguistics)」という用語を用いる。つまり、地理学的方法論を利用した言語学という意味をより強調して差別化しようという趣旨である。

考慮せねばならない。なぜなら、方言境界(dialect boundary)を引く際に区画の基準になるものが、まさに等語線だからである。

一般的に等語線の種類は、引く方法によって単線等語線(isogloss)と、複線等語線(heterobloss)に分けられる。また、言語学的な基準によって語彙等語線(lexical isogloss)、発音等語線(pronunciation isogloss)、音声等語線(phonetic isogloss)、音韻等語線(phonemic isogloss)、形態等語線(morphological isogloss)、統語等語線(syntactic isogloss)、意味等語線(semantic isogloss)(?)に分けられている。(J. K. Chambers & P. Trudgill 1980:112- 115)

だが、言語の外的な要因によって同じであったり異なって判断されることもある。歴史的、社会的、地理的要因によって、或いは方言学者の心理的反応によって方言の境界が引かれることもあり得る。このような方言境界を、単純に従来の言語学的な等語線概念で説明することは難しい。言語外的な要因も方言区画の基準に適用される可能性があるからである。しかしだからこそ、生え抜きによって導かれるその地域の方言区画が、生きていることばとしての方言を追求するために新たな解釈方法で提示されもし、純粋に言語学的な要因で方言区画を試みた結果を比較検討の資料として使うこともできるのである。本稿ではこのような可能性を確かめようと思う。

まず、収集した方言資料の分析を通して、方言話者の方言境界(dialect boundary)に対する認識能力を確認し、第二に、新たな等語線概念や用語を考え、第三に、話し手が自分の地元のことばに感じる同類性や差別性を究明するため、慶尚北道を中心に方言区画を試みた後、この等語線の適用可能性と意義を明らかにしたい。同時に、方言学者の方言境界意識の中に、言語学的にどのような弁別要素が働いているのか推論もしたいと思う。

2. 先行研究の検討と用語設定の必要性

1) 先行研究の検討

土着民の言語意識に基づいて方言を研究したものとしては Dennis R. Preston (1989)があるが、彼はこの論著で「Perceptual Dialectology(知覚的方言学)」という概念を設けている。また、任榮哲(1992)では在外韓国人の母国語に対する言語意識に

ついて分析している。李相揆(1995)ではイメージ地図(image maps)という用語を挙げ、生え抜きは現在住んでいる地域と他の地域とのことばの違いを認識しているから、これに関しての研究が必要だと唱えている。^{vi}

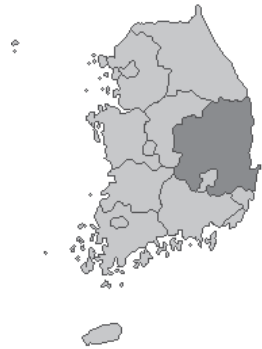
2) 用語の設定

自分の出身地域のことばは心に深く刻まれ、決して忘れられない一種の「跡」である。であるなら、自分の出身地であり居住地でもある地域のことばと隣接地域のことばが、同じだとか違うと感じる抽象化されたことばの境界に対する感覚もあるはずである。この感覚は、生え抜きの直観(intuition)によって印象的に認識される。このような印象による方言境界(等語線)という点に焦点を置いて、本稿では「印象的等語線(impressive isogloss)」という用語を用いることにする。つまりこの用語は、生え抜きの心理に内在する等語線ということになる。

3. 調査の過程および設問とインフォーマント

1) 調査の過程

この調査のため1993年から1995年にかけて、慶尚北道240余りの面(면)^{vii}を最小単位として現地調査、或いは通信調査を実施し、1996年と1997年には幾つかの地域を標本として確認調査を行った。その結果、51人のインフォーマントから予想通りの情報を収集することができた。これをまとめたものを基本資料とする。



[地図1] 慶尚北道の位置^{viii}

2) アンケート用紙

アンケート用紙の設問はインフォーマントの考えを問う内容なので、会話の流れから自然に引き出すことが大事である。例えば、ここに来る前に近くの地域に寄っ

^{vi} イメージ地図(image maps)は、生え抜きが現在住んでいる地域と他の地域のことばの違いを認識しているのかについての設問を基に、方言境界や等語地帯或いは転移地帯に対する、より精密な等語線を発見するために考案された地図である。(李相揆 1995:133)

^{vii} 日本でいう「村」程度の規模の行政区画。

^{viii} <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%85%B6%E5%B0%9A%E5%8C%97%E9%81%93> より引用。

て来たが、その地域の話し方がここの地域とは違うとか似ているのようになんげなく話題に出すと、殆どが正誤反応を見せた。このように反応を引き出した後で次のような質問をしてみると、積極的に何かしら伝えようとする意思を表してくれる場合が多かった。

1. あなたは、この地元のことばがどこまでは同じでどこまでは違うと感じますか。具体的に町内の名や面(村)、郡単位で教えてください。
2. では、この地元のことばの中で、他の地域とは異なって使われることばがあったら、教えてください。

3) インフォーマント

実際に現地調査をしてみると、インフォーマントが自分の出身地域のことばに確信や認識を持っていることが確認できた。これはインフォーマントの性別や出身校、職業とも何ら関係がなく、他の地域のことばから受ける影響の程度にもさほど関係がない。今、その地域に住んでなくても良く、言語形成期(幼年期～青少年期)に生まれた地域で過ごせば、大体そのような認識を持っている。これは自分の方言に対する保守的な傾向とも言えるが、崔明玉(1992)で農村地域と漁村地域に住む方言話者の身分を基準に、班常(반상)^{ix}のことば意識を当てはめる理論よりは一般的な観点だと言える。(金徳鎬 1997:183)

<インフォーマント(51人)>

[榮州] 張〇〇(76, 男, 平恩面)

[奉化] 申〇〇(56, 男, 物野面)

[蔚珍] 朴〇〇(65, 女, 平海邑)^x

[聞慶] 梁〇〇(66, 男, 加恩邑), 鄭〇〇(55, 女, 虎溪面), 姜〇〇(38, 男, 聞慶邑)

[醴泉] 李〇〇(61, 男, 龍宮面), 裴〇〇(61, 男, 普門面), 鄭〇〇(65, 男, 知保面),

李〇〇(62, 男, 龍宮面), 崔〇〇(77, 女, 虎鳴面), 李〇〇(65, 男, 開浦面),

金〇〇(57, 男, 普門面), 任〇〇(63, 男, 龍宮面), 安〇〇(65, 男, 醴泉邑)

[安東] 權〇〇(73, 男, 南先面), 權〇〇(74, 男, 豊川面), 金〇〇(75, 男, 南先面),

^{ix} 「班常」とは、韓国の貴族階級「兩班(양반)」と「一般庶民(常人: 상인)」のこと。

^x 「邑(읍: ゆう)」とは、人口2万以上5万以下の小都市を言う。

- 孫〇〇(82, 男, 吉安面), 金〇〇(46, 男, 臥龍面)
- [英陽] 金〇〇(65, 女, 首比面)
- [尚州] 趙〇〇(63, 男, 利安面), 李〇〇(72, 男, 青里面), 郭〇〇(62, 男, 化西面),
金〇〇(63, 男, 咸昌邑), 李〇〇(42, 男, 化北面), 鄭〇〇(69, 男, 功城面),
朴〇〇(47, 男, 利安面)
- [義城] 金〇〇(46, 男, 金城面), 蘇〇〇(58, 男, 安溪面), 金〇〇(61, 男, 舍谷面),
金〇〇(70, 女, 安平面)
- [青松] 鄭〇〇(66, 女, 府南面)
- [金泉] 朴〇〇(61, 男, 知礼面), 金〇〇(73, 男, 南面), 全〇〇(62, 男, 禦侮面)
- [善山] 崔〇〇(74, 男, 山東面), 張〇〇(63, 男, 高牙邑)
- [軍威] 申〇〇(74, 男, 山城面), 申〇〇(48, 男, 缶溪面)
- [浦項] 李〇〇(64, 男, 長馨面)
- [星州] 裴〇〇(65, 男, 星州邑)
- [漆谷] 金〇〇(67, 男, 若木面)
- [慶山] 朴〇〇(62, 男, 珍良邑)
- [永川] 鄭〇〇(63, 男, 紫陽面), 孫〇〇(65, 男, 古鏡面)
- [達城] 朴〇〇(53, 男, 花園邑)
- [慶州] 權〇〇(41, 男, 内南面), 李〇〇(54, 男, 陽北面), 鳳〇〇(78, 女, 内南面)
- [鬱陵] 李〇〇(63, 男, 鬱陵邑)

4. 調査内容の分析・まとめと方言区画

1) 調査内容の分析とまとめ

栄州市地域のインフォーマントの場合、栄州、安東、奉化は同じことばで、醴泉、尚州とは若干異なることば、蔚珍とは非常に異なることばと認識している。

栄州	栄州=安東, 栄州=奉化, 栄州/醴泉・尚州, 栄州//蔚珍
----	--------------------------------

(≡:非常に似ている, =:似ている, /:異なる, //:非常に異なる)^{xi}

奉化郡地域の場合、この地域のインフォーマントは、栄州とは極めて似ているが、安東とも似ていると認識している。

奉化	奉化≡栄州, 奉化=安東
----	--------------

蔚珍地域に住む人たちは、蔚珍郡内の僅かな違いを報告しているが、蔚珍郡の遠南面を中心に北蔚珍と南蔚珍はそれぞれ違うと認識している。

^{xi} 以下同様。

蔚珍	北蔚珍/蔚珍遠南/南蔚珍
----	--------------

道境^{xii}のある聞慶地域では、梨花嶺を中央に忠清北道とは違うと認識しており、尚州地域とはことばが同じだが東隣の醴泉とも異なると認識している。また、尚州だけでなく善山、金泉まで同じようなことばを使っていると回答している。

聞慶	忠清北道/(梨花嶺)/尚州=聞慶/□泉, 聞慶=善山=尚州=□泉
----	----------------------------------

醴泉地域のインフォーマントは安東、奉化、榮州と似たことばを使っていると認識しているが、尚州、錦汀、金泉とは異なると回答している。醴泉郡龍宮面地域のインフォーマントで、隣の聞慶市山陽面の一部地域のことばと似ていると、細かく報告する者もいた。

醴泉	醴泉=安東, 忠清道/{竹嶺}/醴泉=安東=奉化, 醴泉(龍宮面)/聞慶(山陽面), 醴泉=安東=榮州=奉化/錦汀・尚州・金陵, 聞慶(山陽面一部)=醴泉=安東/錦汀・尚州, 醴泉=榮州・安東, 醴泉/錦汀・尚州
----	--

安東地域のインフォーマントは安東、醴泉、榮州、奉化、英陽は同じ方言圏だが、義城、尚州、聞慶は異なると認識している傾向が強かった。また、南先面ペプシル(뽕실)と琴韶里が吉安川を境に細かい部分で異なると回答している。

安東	南先面ペプシル/{吉安川}/琴韶里, 安東=醴泉=榮州//義城・尚州, 安東=榮州・奉化//義城・尚州・醴泉, 安東=醴泉=榮州=奉化=英陽//義城, 安東=醴泉//錦汀・尚州・聞慶
----	---

英陽地域のインフォーマントは、蔚珍と英陽のことばが違うとしている。これは蔚珍と英陽の郡境に高い山々が横たわり、互いの通行を遮っているためと思われる。

英陽	英陽//蔚珍
----	--------

^{xii} 韓国の「道」はおおよそ日本の「県」に当たる。

尚州地域は道境を挟んでいる地域だけに非常に様々な認識が確認されたが、これらをまとめると尚州、善山、金泉は同じで、小白山を中央に忠清北道の報恩、槐山とは違うことば、慶尚北道側は義城、醴泉、安東、漆谷とも異なるということだった。義城とは間に洛東江が流れているので、ことばが違うと回答したケースもある。中でも尚州市牟東、玉山、青里地域は善山、金泉とことばが違うという回答は小さな違いを認識している結果として、特に尚州側の牟東地域は忠清北道との転移地域的な特徴を考慮した報告であると言える。

尚州	尚州=善山=金陵(金泉), 尚州/醴泉=安東, 尚州/漆谷郡=大邱, 尚州//報恩(忠清道), 尚州(化北・化南)= 忠清北道(槐山郡松面), 尚州≡錦汀/{潁江}/醴泉, 尚州≡錦汀/醴泉・義城, 尚州(牟東・玉山・ 青里)//善山・金泉, 忠清北道//{小白山}//尚州, 尚州//{洛東江}//義 城, 聞慶//{籠岩岬}//尚州, 尚州市化南面(忠清北道のことば), 尚州市洛東面(大邱のイントネーション)
----	--

義城地域では、軍威郡と同じことばだと回答している。安東地域のインフォーマントの考えとは異なり安東、醴泉とも同じだことばだと回答しているが、これは義城邑と安平面の一部地域が安東と隣り合わせているので、安東のことばに似ていると認識したのであろう。同じ郡内であっても義城南部の金城面は安東とは異なるという回答や、平野地帯の義城西部と山岳地域の義城東部を違うと認識したことは、義城地域を慶尚北道内の転移地域(transition area)と看做す、重要な根拠となる。

義城	義城=軍威, 義城=安東・醴泉, 義城(比安=安溪)/義城(金城=佳音), 義城西部(平野)/義城東部(山岳), 義城(安平, 義城邑:安東ことば)/ 義城(金城面(飛鳳里・塔里)・佳音面・春山面)
----	---

青松地域についての回答は副次的な内容だったのだが、青松の府南面と青松邑が違うと認識されていた。これは、同じ郡内でも周王山を境に南と北では異なることを認識している結果である。

青松	青松(府南面)/青松(青雲里)
----	-----------------

金泉地域は、尚州のことばと似ているが、南側の亀尾と星州とは多少違いがあると回答されている。

金泉	金泉=尚州, 金泉/亀尾, 金泉/星州
----	---------------------

亀尾市善山地域のインフォーマントは、尚州地域と漆谷の架山面までは似ており、多富洞峠を越えて漆谷の東明地域は違うと認識している。

亀尾(善山)	善山=尚州, 善山≡漆谷(架山面)/{多富洞峠}/漆谷(東明)・大邱
--------	------------------------------------

軍威地域では、義城地域とは似ていて永川とは異なると認識している。一方、義城地域も鳳陽面までは似ているが義城邑は違うと認識している事実は、義城を慶北内の転移地域と判断できる回答だと言えるだろう。

軍威	軍威=義城, 軍威/永川, 軍威=義城(鳳陽面)/義城邑
----	------------------------------

浦項は港湾都市だが、慶州や永川とはやや異なり、蔚山とは非常に異なると回答している。この、蔚山との違いは、慶尚南道との道境を意識してのことと思われる。

浦項	浦項/慶州, 浦項/永川, 浦項//蔚山
----	----------------------

星州地域のインフォーマントは、洛東江を挟んで漆谷と大邱(達城郡)とでは違うと認識している。

星州	星州/{洛東江}/漆谷郡, 星州/{洛東江}/大邱(達城郡)
----	--------------------------------

漆谷地域のインフォーマントは全般的に大邱地域とことばが似ていると回答している。但し、漆谷の若木地域はむしろ尚州と似ているが大邱とはやや異なると認識している。

漆谷	漆谷=大邱, 漆谷(若木)=尚州, 漆谷(若木)/大邱
----	-----------------------------

慶山地域のインフォーマントは、清道地域と永川地域が似ていると回答している。

慶山	慶山=清道, 慶山=永川
----	--------------

永川地域のインフォーマントは、浦項地域とはことば違うと認識している。

永川	永川/浦項
----	-------

大邱市達城地域のインフォーマントは、清道地域と慶山地域が似ていると回答している。

大邱(達城)	大邱(達城)=清道, 大邱(達城)=慶山
--------	----------------------

慶州地域では隣の浦項と永川地域とはことばが異なり、盈徳とも違うと回答しているが、浦項市長髻面や永川の一部に似ている地域もあると認識している。これは、これらの地域を繋いでいる交通網の発達による影響と思われる。

慶州	慶州/浦項, 慶州/永川, 慶州=浦項(長髻面)=永川の一部, 慶州/永川市他西側, 慶州/盈徳, 内南/{活川}慶南, 慶州//蔚山
----	--

以上の回答を見ると、大部分が面や郡単位で比較、対照されている。だが、何人かのインフォーマントが、同じ方言圏に区画されている地域内であっても多少の違いがあると報告したケースもあった。つまり、第4地域では醴泉郡と奉化郡のことばを若干異なると認識し、安東市、奉化郡と英陽郡のことばはやや異なると認識しているとか、安東市の臨河面、吉安面と義城郡の点谷面、玉山面のことばがやや違うと回答しているが、これは行政区域を意識した結果であろうと思われる。第3地域では同じ尚州地域で洛東面、青里面のことばに比べて化北面、化南面のことばがやや違うと認識しているが、これは忠北との境界地域で発見される転移地域(transition area)を意識した結果であろう。このようなケースは金泉市でも同じである。鳳山面、代項面は忠北方言の特徴を有し、釜項面、大徳面、甌山面、知礼面では全羅方言の特徴が見られるとし、金泉市を3つの言語分化地域に分ける場合があるが、これも転移地域を意識したものである。第2地域でも慶北の星州郡と大邱市達城郡のことばがやや異なると回答したケースや、慶北永川市と慶山市、永川市と軍威郡でも同様の報告が

あったが、これも郡単位の行政区域を意識して分けたものと考えられる。このような現象は第4地域でも同様に発生する。慶北浦項市と慶州市に違いがあるとか、慶北盈徳郡と蔚珍郡のことばが少しずつ異なるという意見も、全て行政区域を意識した違いによるものであることは明らかなだ。

しかし、同じ市・郡でことばが違うと回答したケースもある。義城郡の生え抜きたちが東義城と西義城のように分けているのは興味深い。義城郡安平面に住む金〇〇氏(70, 女, 末九里)が、安平と義城邑が安東のことばで(그러이껴-드래요[여]), 義城邑飛鳳洞を過ぎて金城面塔里、佳音面、春山面は永川のことば(그런기오-그러쿠마)だと回答した例が代表的である。他にも安溪面に住む蘇〇〇氏(58, 男, 土每里)、舎谷面に住む金〇〇氏(61, 男, 陰地洞)、金城面に住む金〇〇氏(46, 男, 鶴尾里)も同様の回答だった。こういった事実は、申承遠(1996)でも確認されている。漆谷郡も若木面、石積面、架山面と東明面、枝川面のことばは異なり、軍威郡では軍威邑、孝令面、缶溪面までは義城地域語と似ているけれど、古老面、義興面、山城面のことばは永川地域語と似ている。青松郡の場合は、府南面、府東面と青松邑、巴川面のことばが違うという記述がある。

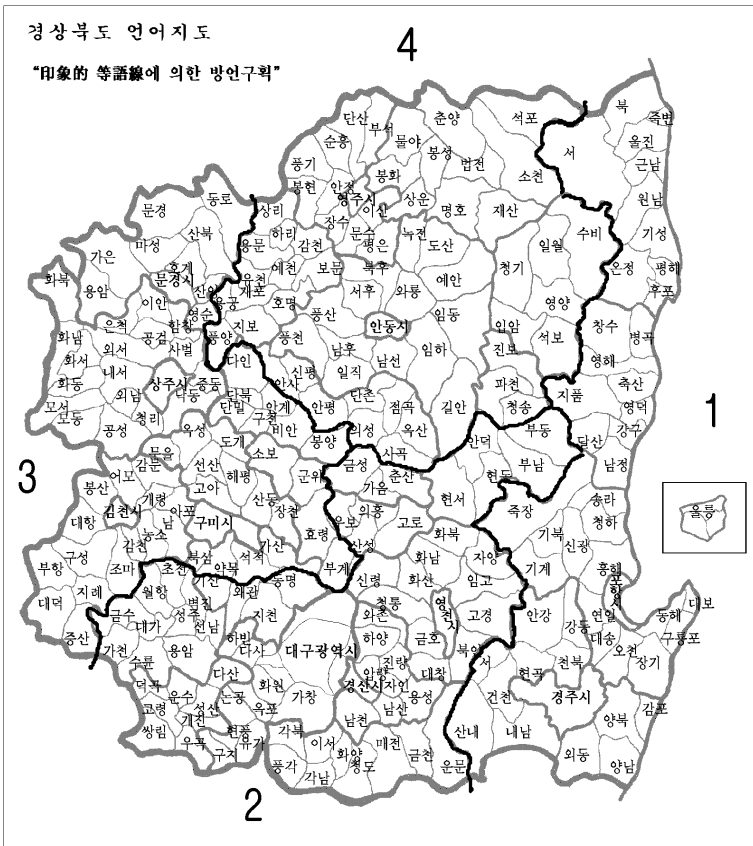
生え抜きのこのような報告は、単に行政区域を中心に方言区画を行ってきたこれまでの慣行に対し示唆するところは大きい。他に、慶州市、蔚珍郡でも同じ市・郡を二分、三分する回答があったが、慶州の場合、甘浦邑、陽南面と山内面、内南面のことばが違うという回答は海岸地帯と内陸地帯の違いと理解でき、蔚珍で近南面と遠南面のことばが違うという回答は(朴〇〇氏, 65, 女, 蔚珍郡平安邑)、この地域が江原道と境界地域にあるため転移地域を意識した結果であると思われる。

2) 方言区画

以上の回答内容と分析に基づき、印象的等語線で方言区画地図を作成する。何枚かの地図に、ことばが似ていると認識している方言地域を一括りにし、違うと認識している地域には境界線を引くという作業を行う。そして各地域別の地図を総合したのが[地図 1]である。これら地域の区分けは以下のようになっている。

第1地域(東部海岸の心理的方言圏) 慶州市、浦項市、盈徳郡、蔚珍郡

- 第2地域(南部内陸の心理的方言圏) 大邱市、星州郡、高靈郡、達城郡、清道郡、慶山市、永川市、義城郡金城面・佳音面・春山面、軍威郡友保面・山城面・義興面・古老面、青松郡安德面・府東面・府南面・縣東面・縣西面
- 第3地域(西北境界の心理的方言圏) 安東市、英陽郡、奉化郡、永川市、醴泉郡、義城郡安寺面・新平面・義城邑・点谷面・玉山面・舎谷面、青松郡眞宝面・巴川面・青松邑



[地図 2] 慶尚北道の印象的等語線による方言区画

5. これまでの方言区画との比較

慶北方言区画についての先行研究では、千時権(1965)と李基百(1969)が代表的である。

(1) 千時権(1965)－疑問終結語尾(終助詞)を中心に方言区画を試みた。[地図 3]

① 第1地区(－능교型地域) 大邱市、慶州市、達城郡、慶山市、清道郡、高靈郡、星州郡、漆谷郡、軍威郡、永川市、月城郡、迎日郡、浦項市、青松郡、盈徳郡含む。

② 第2地区(－니겨型地域) 安東市、義城郡、醴泉郡、義城邑、奉化郡、英陽郡、永川市、蔚珍郡、青松郡の一部。

③ 第3地区(－여型地域) 尚州市、善山邑、金泉市、金陵郡、聞慶市



[地図 3]

第1地区- 능교型

第2地区- 니겨型

第3地区- 여型

(2) 李基百(1969)－音韻、語彙、文法に分けて方言区画を試みた。[地図 4]

① 音韻-‘ja/ε/i’{별(星), 별(日差し), 병(病), 벼락(雷)}, ‘-lk’{닭(鶏), 맑다(清い)}

*東北海岸地域が[地図 4]と類似

東南部(東北海岸地域/内陸地域)

//西北部(西北境界地域/内陸地域)

② 語彙-삼(シャベル)/{수금포}, 통시(便所)/{똥간, 칩간}, 구유(飼い葉桶), 죽통(まぐさ桶)/{구이}, 두부(豆腐)/{조피, 조포}

A. 東北海岸地域(蔚珍郡、盈徳郡、英陽郡、青松郡の一部、迎日郡)

4]

B. 西北境界地域(奉化郡、永川市、醴泉郡、聞慶市、



[地図 4]

尚州市)

- C. 中部内陸地域(安東市、義城郡、青松郡の一部、軍威郡の一部、善山邑、榮川市、月城郡)
- D. 南部地域(金陵郡、漆谷郡、星州郡、高靈郡、達城郡、大邱市、清道郡、慶山市)

③文法体系—疑問形語尾 [地図 5]

- A. タイプ 1—‘지{짜}에, -지{짜}아, -능{ㅇ}교, 능기{깡}가’型

:南部地域(星州市、漆谷郡、軍威郡、永川市、迎日郡、浦項市、盈徳郡)

- B. タイプ 2—‘다끼, -니끼, 끼끼’型

:中北部地域(榮州市、奉化郡、聞慶市の一部、安東市、蔚珍郡、軍威郡、英陽郡) [地図 5]

- C. タイプ 3—‘여’型

:中西部地域(尚州市、善山郡、金泉市、聞慶市の一部、義城邑の一部)



西部地域は、千時権(1965:12)と李基百(1969:34)の「疑問終結語尾」を中心に分けた区画と相当な部分で一致し、東部海岸地域は、李基百(1969:28)の「語彙」を中心意分けた地域(조피, 구이, 뒤간~칙간)とほぼ一致する。つまり、これら方言区画を重ねて西部側と東部側の結果を総合した地図を予想すればよい。

従って「印象的等語線」は、言語学的に文法的等語線と語彙的等語線を包括する結果である可能性が高い。

このような推論は、鄭喆(1997:105)の[地図IV]「慶北地域語の区画图」を見ると一層明らかだが([地図 6])、この結果は本稿[地図 2]「印象的等



[地図 6]

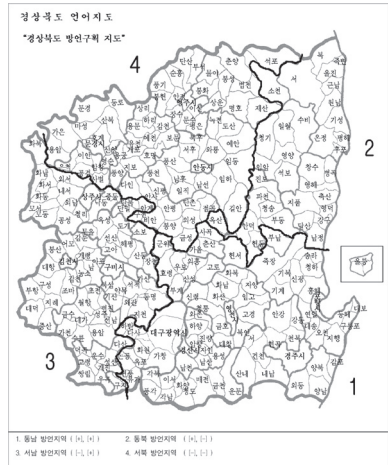
(鄭喆 1977:105, [地図IV])

語線による方言区画」とほぼ一致している。

鄭喆(1997)で方言区画のために用いた言語学的な調査項目の、音韻的要素 2 つ(母音‘ㅁ:ㅓ’の弁別有無、子音‘ㅃ:ㅈ’の弁別有無)、語彙的要素 8 つ、文法的要素 8 つ(曲用、活用語尾の違い)、その他(イントネーション、地域住民の意識)等から、語彙要素や文法要素が遥かに大きく作用するということが分かる。xiii

その結果、インフォーマントの心理に内在する「印象的等語線」は、言語額的要素では文法要素[曲用語尾、活用語尾]の違いと語源的に異なっており、作られた語彙要素が働いていることが確認できる。実際の現地調査でも、このような相違点を認識している回答が多く見られた。xiv

他にこのような事実が確認できる論拠として、「認識的等語線による方言区画地図([地図1])と拙稿(1997:283)で用いた「慶尚北道方言区画地図」([地図6])とは異なることが挙げられる。なぜ異なるのか。理由は、前者([地図1])印象的等語線区画地図)が言語学的に語彙と文法(語末語尾)分野を主として方言区画を試みた結果に対し、後者([地図7])は音韻(音韻リストと関連のある語彙も含む)[35項目/55%]、純粋語彙[18項目/29%]、文法(統語的な文構造も含む)[8項目/13%]、意味[2項目/3%]という分野でそれぞれの項目のポイントに差がつくように計算し、総合して出された結果だからである。このように、言語学的な要素を基準に対比してみると、印象



[地図7]慶尚北道方言区画地図
(金徳鎬 1997:283[地図77])

xiii 音韻-틀:틸, 글:걸, 쌀:살

語彙-아버지, 어머니, 오빠, 뒷간, 간장, 부엌, 떡-다, 틀리-다

曲用-主語格(-은), 主格(-가), 対格(-를)

活用(語末語尾)--어, -면, -느냐, -이나, -디니까/디니다

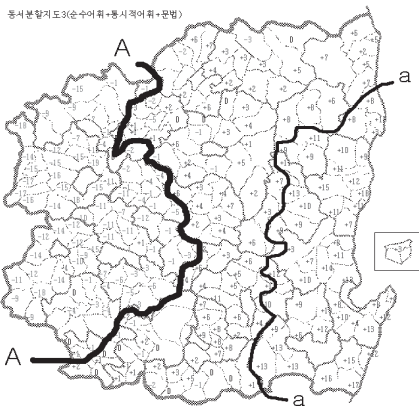
xiv 例えば、「말끝이 무드럽지다」と表現しつつも語末語尾の違いを報告したケースが多く、内陸地域(農業)と海岸地域(漁業)の違いを聞き分けようという意識から、使っていることが互いに異なると報告した場合も多い。(아빠-아부지)

的等語線の方言区画は全体的に音韻的要素が影響して出来上がった区画ではないという推論に達する。

この推論を再度検証するため、拙稿(1997)で用いた 70 枚の言語地図から音韻的な分化に関連のある項目を除き、純粹語彙的なもの(18 枚)と通時的な規則や通事的な音韻リストに関連のある語彙等語線(22 枚)、そして文法的等語線の中で語尾に関する分化や再構造化に関連のあるものと通事的文法構造によるもの(7 枚)等、全部で 47 枚の言語地図^{xv}を抜粋してそれぞれを統合した結果、東西に分かれる地図[地図 8]と南北に分かれる地図[地図 9]が出来上がった。

경상북도 언어지도

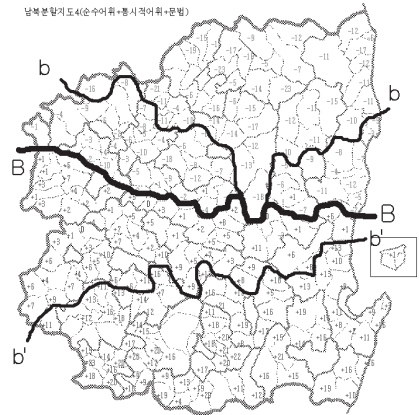
동서분할지도 3(순수어휘+통시적어휘+문법)



[地図 8]

경상북도 언어지도

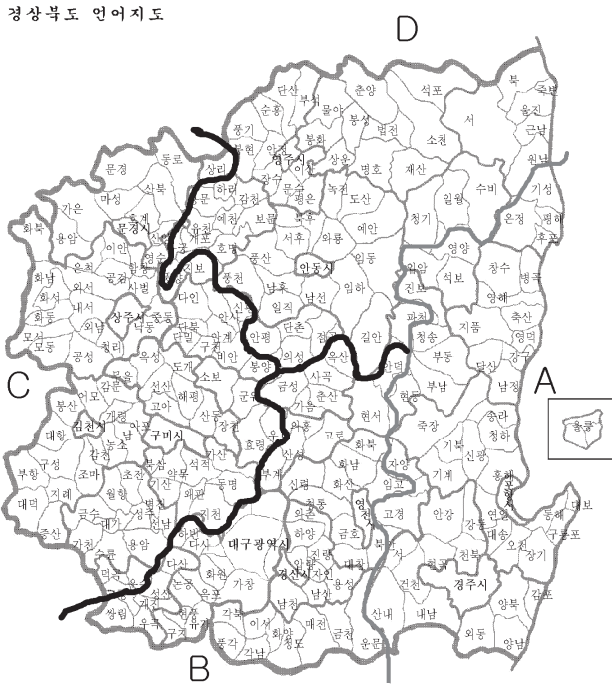
남북분할지도 4(순수어휘+통시적어휘+문법)



[地図 9]

^{xv} [地図 13]누이, [地図 14]가오리(エイ魚), [地図 15]홀아비, [地図 18]누에, [地図 22]애벌레다, [地図 23]그을음, [地図 24]아궁이, [地図 25]무:, [地図 26]가위, [地図 27]머루, [地図 28]콩나물, [地図 30]수수, [地図 31](콩을)불린다, [地図 32]허, [地図 33]다리미, [地図 34]뻘(語彙), [地図 35]뻘(과생어미), [地図 36]키, [地図 38]벽, [地図 45]소꿉질, [地図 46]젓가락(저-), [地図 46]젓가락(-가락), [地図 47]구유, [地図 48]뽕족하게(뽕족-), [地図 48]뽕족하게(-하게), [地図 49]가볍다, [地図 50]큰아버지(큰-), [地図 50]큰아버지(-아버지), [地図 51]뜰(뜨럭), [地図 52]화:로(火炉), [地図 53]식혜, [地図 54]달-오, [地図 55]번데기, [地図 56]회오리바람, [地図 57]상추, [地図 58]부추, [地図 59]두부, [地図 60]주걱, [地図 61]옥수수, [地図 62]열구리, [地図 65]모래(砂), [地図 66]간장, [地図 67]대님, [地図 69]값+이(主格語尾), [地図 70]물+을(目的格語尾), [地図 71]共同格(나+와), [地図 72]동생+에게(与格語尾)의 47 枚의言語地圖が分析対象である。

[地図 8]でA-Aは、西部方言型と東部方言型を区分するメインの等語線で、a-aはメインの等語線より10ポイント以上差のある下位等語線である。[地図 9]のB-Bは、北部方言型と南部方言型とを区分するメイン等語線で、b-bと b'-b'はそれぞれメイン等語線より同じく10ポイント以上の差がある下位等語線である。これら2種類の統合地図を更に合わせて出来上がったのが[地図 10]である。



[地図 10]

方言話者の意識に内在する方言圏への認識を基に区画した方言地図([地図 2])と、そういった方言区画を作り出すのに作用したと予測された言語的な要素(語彙、文法)に基づいて総合した言語地図([地図 10])を比べてみると、殆ど同じように区画されて

いることが確認できる。従って、方言話者の心理の中にある、自分の地域に対する言語意識は、言語学的基準では語彙的な要素と文法的な要素が作用しているという事実が立証できる。

慶北方言区画を試みた先行研究、千時権(1965)と李基百(1969)の場合、方言話者の非言語的な境界意識をある程度考慮して行われた結果だったという蓋然性が高い。^{xvi} 鄭喆(1997)では「地域住民の意識」を考慮すると一言述べている。

これまで成されてきた方言区画に関連する研究は、その研究者がその地域出身の方言話者なら本稿で考察した印象的等語線、即ち非言語的な境界意識が方言区画を作成するに当たって、何ら影響がなかったと否定することはできないだろう。

6. まとめ

理想的な方言区画は音韻、語彙、文法を基に作った区画地図が全て1つに合致することだろうが、実際になかなかそうはいかない。だからと言って、特別な幾つかの語末語尾や音素だけを基にして作った方言区画の結果を、対象地域の代表的な方言区画と看做すことはできない。方言区画地図を完成させるためには、様々な要素を基準とせねばならないからだ。それは音韻、語彙、文法的特徴などの言語的な要素である。これまでは大方このような言語学的な基準を統合したり分類して区画地図を作成した。しかし、方言話者の境界意識のような非言語学的な要素を無視することはできないし、今後方言区画が普遍的で大衆的な呼応を得るためには、必ず考慮せねばならない部分であろう。

本稿では非言語学的な要素である方言話者の境界意識を、「印象的等語線」という用語を使い、その概念で定義付けた。これは、方言区画において言語学的な要素だけで境目を定める際に起こり得る問題点を補うことのできる、新たな概念と言えよう。^{xvii} これを言語学的な基準と比べるなら、文法要素(曲用語尾、活用語尾)の違いと語源的に異なって生成された語彙の違いが主に作用していることが立証できた。

^{xvi} 両学者は、研究地域出身である。

^{xvii} 逆に、研究者の意識にある境界意識が合理的だと客観的な方言区画を作る際に、妨害要素として働く蓋然性についても見直す機会になる。

また、このような方法を用いて、慶北を4つの心理的方言圏に区画することができた。慶州市、浦項市、盈徳郡などが中心の東部海岸方言圏([地図 2]の第1地域-[地図 10]のA地域)、大邱市、慶山市などが中心の南部内陸方言圏([地図 2]の第2地域-[地図 10]のB地域)、尚州市、金泉市、善山郡などが中心の西部境界方言圏([地図 2]の第3地域-[地図 10]のC地域)、安東市、榮州市、奉化郡などが中心の北部内陸方言圏([地図 2]の第4地域-[地図 10]のD地域)に分けられる。

結局、本稿の印象的等語線に関する研究は知覚方言学を説明するためのものだ。知覚方言学の研究の可能性をこの研究を通じて確認することができた。

7. 参考文献

- 金徳鎬(1996) “電算處理에 의한 言語地圖 作成에 對하여”, 「내일을 위한 方言 研究」, 慶北大出版部
- 金徳鎬(1997) “慶北方言의 地理言語學的 研究”, 慶北大 博士論文
- 金徳鎬(2001) 「慶北方言의 地理言語學」, 월인
- 申承遠(1996) “慶北 義城地域語의 音韻論的 分化 研究”, 嶺南大 博士論文
- 李基百(1969) “慶尚北道の 方言 区画”, 「동서문화」3, 啓明大
- 李相揆(1995) 「方言學」, 학연사
- 鄭 喆(1997) “東南地域語의 下位方言 区画 研究”, 「語文論叢」31号, 慶北語文學會
- 千時權(1965) “慶北 地方의 方言 区画”, 「語文學」13
- 崔明玉(1992) “慶尚北道の 言語地理學: 副詞形 ‘아 X’ 의 母音調和를 中心으로”, 「國語學」14
- 任榮哲(1992) 「在日·在米韓人および韓国人の言語生活の実態」, くろしお出版
- Chamber, J.K. & Trudgill, P. (1980), *Dialectology*, Chambridge Univ., Press.
- Preston, Dennis R. (1989), 「Perception Dialectology: Nonlinguists' Views of Areal Linguistics」, Dordrecht [etc.]: Foris. -(Topics in Sociolinguistics;7)

【追記】

本稿は、金徳鎬(김덕호)による原著論文「印象的等語線에 대한 研究」(韓国語文學會『語文學』第73輯(2001.6))を補い、これを瀧口恵

子が日本語に翻訳・再構成し、岸江信介が校訂したものである。

